

地区の皆さんが、毛布や布団などを次々に運び込んでくださいました。また、おにぎりの支援はもちろん、地区を輪番にした炊き出し体制もすっかりとできていましたので、食事に関

する心配は全くありませんでした。市による避難所運営体制も11日の夜には整いました。その後、市の避難所運営者と学校との調整役として、横山小学校の男性職員が4日間ほど交代で

宿泊しました。それ以外は、全て市の職員の皆さんによる避難所運営が行われました。避難所開設当初から運営準備に当たってくださった市の職員の方は、そ

の後3日間ほど、24時間体制で体育館に詰めていらっしゃいました。日を追うごとに見られる憔悴(せうたい)しきった顔を見るたびに頭の下がる思いでした。改めて感謝申し上げます。

●避難所の開設・運営に奔走②

避難者の自主運営で自立へ 私自身が勇気付けられる日々

寒々とした体育館。避難者がここで新たな時を過ごすのか

平成23年3月11日、午後2時46分、当時私は福祉事務所生活福祉課に勤務していました。

その日は年度末と言うこともあり朝から慌ただしく過ごしていました。午後から予定していた用事を済ませ外出先から戻り自分のデスクに着いた時、今まで経験したことがない長く大きな揺れに見舞われました。

話がありました。第一陣が正午に到着、避難所は登米中学校の体育館という事でした。登米は私の地元でもあり、何かの役に立ちたいと思っていた矢先、所長から私に避難所開設の準備に当たれという指示がありました。

不安を抱いたまま私ほか二人の職員は、登米中学校の体育館に急ぎました。着いてみれば何事もなかったかのような、がらんと寒々とした空間。全ての時間が止まった体育館は、これから南三陸町の避難者が新たな時を刻むにふさわしい場所とはとうてい思えませんでした。

**避難所に自治会立ち上げ提案
職員と自治会で役割を分担**

避難者の到着まであと2時間を切った頃、町内の防災無線による寝具、衣類、その他日用品の協力放送があり、体育館はあつと言う間に物資の山にな

夕方から各地に避難所が開設されました。電気、水道といったライフラインや電話などの情報が途絶えた中で、よもや隣の南三陸町に大津波が押し寄せた事など夢にも思わないまま1日目の夜を迎えました。

大震災発生から2日目の3月13日、今日の自分の任務は何かと不安と焦りのまま職場に車を走らせ、その日も、いつも通りの朝礼が始まりました。所長から、今日より南三陸町から250人の避難者を登米市で受け入れる旨の

りました。受け入れ予定の人数に足りる物資がそろい、あとは避難者の到着を待つばかりとなりました。

しかし、私には衣食の事だけではない最大の悩みがありました。それは、避難者の心のケアでした。食べ物や衣類が豊富にあっても、避難者が毎日下を向いて涙を拭う姿は、とうてい私には解決不可能と思われたのです。

避難所開設から3日後、私は避難所に自治会を立ち上げる旨の提案をしました。幸い、避難者の中に南三陸町の職員がいました。その方々がリーダーとなり、われわれ市職員と自治会が日々の生活における役割分担を担い、避難所の統制を図りました。

避難所は避難者の自主運営となり、それからは南三陸町の人々の団結力や自立に向けた気概が強く感じられるようになりました。心配していた心のケアどころか、私自身が勇気付けられる日々になったのです。



市内最大の避難所になった迫体育館には、ピーク時に千人を超える市民が避難。底冷えのする体育館で、電気も水もない生活を強いられました



市内全域で道路などが破損(長沼ダム周辺の道路)



▲地震発生時の時刻を示したまま止まった時計

あの震災を
特集 忘れない